6　歯の健康（案）（H.23.9.8版）

〈指標の達成状況〉

A．目標値に達した	5
B．目標値に達していないが改善傾向にある	5
C．変わらない	1
D．悪くなっている	0

※各指標の達成状況については、別添シート参照

〈総括評価〉

○幼児期のう蝕予防
②フッ化物歯面塗布を受けたことのある幼児の割合において改善がみられ目標値を達成し、①う歯のない幼児の割合、④一人平均う歯数、⑤フッ化物配合歯磨剤を使用している人の割合、⑥過去1年間に個別的な歯口清掃指導を受けた人の割合において改善がみられた。③間食として甘味食品・飲料を頻回飲食する習慣のある幼児の割合においては、大きな変化はみられなかった。

○成人期の歯周病予防
⑦進行した歯周炎を有する人の割合（40、50歳）において改善がみられ目標値を達成し、⑧歯間部清掃用器具の使用する人の割合、⑨喫煙が及ぼす健康影響（歯周病）について知っている人の割合において改善がみられた。

○歯の喪失予防
⑪80歳で20歯以上、60歳で24歯以上の自分の歯を有する人の割合、⑫過去1年間に定期的な歯石除去や歯面清掃を受けた人の割合、⑬過去1年間に定期的な歯科検診を受けた人の割合において改善がみられ目標値を達成した。

〈指標に関連した施策〉

○ 8020運動推進特別事業（H12～）
○ 歯の衛生週間
○ 歯の健康力推進歯科医師等養成講習会（H20～）
○ フッ化物洗口のガイドライン策定
○ 母子保健法・健康診査（1歳6ヶ月、3歳・歯科）
○ 母と子のよい歯のコンクール
○ 学校保健安全法（歯科健診）
○ 健康増進法・健康増進事業
　・健康教育：歯周疾患
　・健康相談：歯周疾患
　・訪問指導
　・歯周疾患検診
○ 高齢者医療確保法・特定保健指導（保健指導における学習教材集）
　・歯周病・噛む・歯の健康
　・たばこ
○ 介護保険法
　・介護予防一般高齢者施策・地域介護予防活動支援事業・介護予防事業
　・介護予防特定高齢者施策・通所型介護予防事業あるいは訪問型介護予防事業「口腔機能の向上」
○ たばこの健康影響に関するホームページを立ち上げている等を実施

〈今後の課題〉

○目標値の大半は改善され、そのうち半数が目標値に達したが、その達成状況については、地域差も認められており、また高齢化の進展に伴い咀嚼機能の重要性が一層高まっていることなどから、引き続きライフステージに応じた適切なう蝕・歯周病予防等の「歯の健康」を推進していくことが必要である。

○今後の高齢化を考慮して、健全な食生活等生活の質の向上にも寄与するために、咀嚼機能の維持・改善を図っていくことが一層重要となっていることから、こうした機能面等に着目して評価の在り方を検討する必要がある。

○小児の永久歯う蝕予防については、地域の特性に応じて、フッ化物による洗口やシーラントの活用などを含めて総合的に推進していくことが必要である。

○従来の目標項目においては、高齢化の進展などをふまえ、より的確に把握できるよう歯の健康の取り組み状況についての対象年齢等を含めた評価の在り方について検討する必要がある。（進行した歯周疾患など）

○評価を行うに当たっては、国レベルの目標値の達成状況だけでなく、都道府県の達成状況も考慮して、行っていく必要がある。

健康日本21の目標値に対する直近値に係るデータ評価シート（案）
（H.23.9.8版）

歯の健康分野

記載留意事項・・・各項目の冒頭には、見出しとして分析結果、課題等を要約として記載してください。
詳細なデータ解析をした場合は、解析結果や二次資料を添付してください。

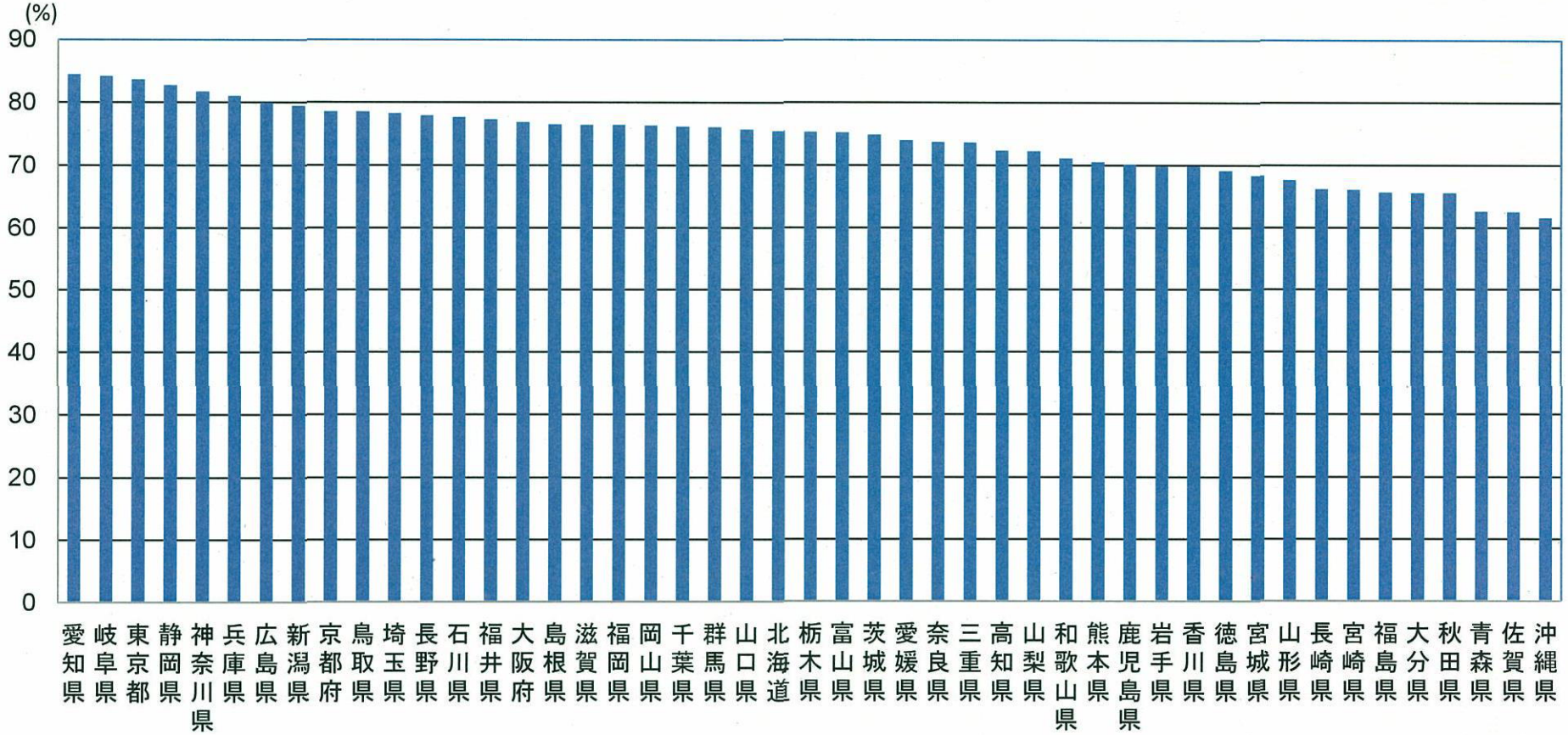
分野：歯の健康

目標項目：6.1　う歯のない幼児の増加（う歯のない幼児の割合－3歳）

目標値	策定時のベースライン値 （H10年度3歳児歯科健康診査）	中間評価 （H15年度3歳児歯科健康診査）	直近実績値 （H21年度3歳児歯科健康診査）
【全国平均】 80%以上	59.5%	68.7%	77.1%

	コメント	
	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴（性、年齢、項目別の分類など）を踏まえた分析	
（1）直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	○直近実績値とベースライン値とを比較すると、17.6ポイント高い。 ○年間の増加率は約1ポイントとやや鈍化しているが、着実に増加している。	
（2）データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題（調査手段、方法、分析材料等）がある場合、記載。	○データは、古い時点（1981年）から利用できるので、長期トレンドが把握可能。	
（3）その他データ分析に係るコメント	○都道府県単位のデータが利用できるため、「目標達成都道府県数（%）」として評価する方法が考えられる。 なお、直近の平成21年度データでは、47都道府県のうち、6都県（愛知県、岐阜県、東京都、静岡県、神奈川県、兵庫県）が目標値（80%以上）を達成している。	
（4）最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○目標に向けて改善したが、目標値に達していない。	B
（5）今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	○フッ化物配合歯磨剤の早期利用や引き続きフッ化物の歯面塗布等を推奨する。 ○う歯のない幼児の割合の高い地域は、一人平均のう歯数も少ないことから、う歯のない幼児の増加により一人平均う歯数の減少を図ることが期待できる。 ○ 地域による格差が見られることから、地域の特性に応じた対策を推進する必要がある（図1）。 （図1：平成21年度の都道府県別データでは、最低値が61.5%、最高値が84.4%（差にして22.9%ポイント）。「う蝕有病者率＝100－う蝕のない幼児の割合」に換算して、比は約2.5となる。）	

図１　う歯のない幼児（３歳児）の割合（ 都道府県別 ）



資料「平成21年度 母子保健法・健康診査（3歳、歯科）に係る実施状況調べ」

分野：歯の健康

目標項目：6.2 フッ化物歯面塗布を受けたことのある幼児の増加（受けたことのある幼児の割合－3歳）

目標値	策定時のベースライン値 （H5年歯科疾患実態調査）	中間評価 （H16年国民健康・栄養調査）	直近実績値 （H21国民健康・栄養調査）
【3歳児の平均】 50%以上	39.6%	37.8%	64.6%

	コメント
	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴（性、年齢、項目別の分類など）を踏まえた分析
（1）直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	○3歳の時点でフッ化物歯面塗布を受けたことのある幼児は、減少傾向から増加傾向に移行しつつある。 ○平成17年の歯科疾患実態調査の結果では、15歳未満で59.2%（3歳の時点では48.9%）であった。 ○3歳の時点での直近実績値は調査方法は異なっているが、有意に増加した。 （3歳児の平均：片側P値＜0.001）
（2）データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題（調査手段、方法、分析材料等）がある場合、記載。	○中間評価と直近値は同じ調査項目で得られた数値であるが、策定時の調査項目は異なっているので、策定時の数値とその後の数値の単純な比較は困難であるが、両方の調査ともに増加傾向が確認されており、両調査ともに自己申告で調査方法には大差がないことから、全体的に増加しているとみて差し支えないと考えられる。 ○歯科疾患実態調査では、フッ化物歯面塗布の調査が1969年から行われ、全体的にみると一貫して増加傾向にある。 ○歯科疾患実態調査で特定の年齢に絞って評価するのは例数の関係で値が不安定である可能性があるので、全体的な傾向を評価するように改めるべきではないか。 また、行政事業として実施されているフッ化物歯面塗布の実施状況を評価するのであれば、厚労省の「地域保健・健康増進事業報告」地域保健編の「母子保健」にある「歯科保健」の「予防処置」の実施人数等のデータは、事業提供度を示す指標として有効活用が可能と考えられる。
（3）その他データ分析に係るコメント	
（4）最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○目標値に達した。 A
（5）今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	○フッ化物歯面塗布は最低限、半年に一度の間隔で受けないと効果があがらないとされているので、今後は、たとえば「定期的にフッ化物歯面塗布を受けている小児の割合」などの目標設定への切り替えも検討する必要がある。現状の経験率を用いた評価でも、この数値が高まれば定期的にフッ化物歯面塗布を受けている割合が高まるはずであり、妥当性はあるが、施策の効果をみるうえでは、効果のあがる方法の実施状況等を評価するのがより適切ではないかと考えられる。 ○フッ化物の歯面塗布の実施場所は、歯科診療所などの歯科医療機関と保健所や市町村保健センターなどの歯科保健施設があるが、歯科疾患実態調査によると、近年は後者よりも前者の割合が多くなっているので、歯科診療の一部として捉えられている面もあると考えられる。いずれにせよ、幼児の保護者に対し予防処置に対する関心を高めるように、市町村等において健康教育・保健指導を推進していくことが必要である。

分野：歯の健康			
目標項目：6.3　間食として甘味食品・飲料を頻回飲食する習慣のある幼児の減少（習慣のある幼児の割合－1歳6ヶ月）			
目標値	策定時のベースライン値 （H3年久保田らによる調査）	中間評価 （H16年国民健康・栄養調査）	直近実績値（H22.10月現在） （H21国民健康・栄養調査）
【1～5歳児の平均】 15%以下（※健康日本21策定時には目標値なし）	29.9%	22.6%	19.7%
	コメント		
（1）直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴（性、年齢、項目別の分類など）を踏まえた分析		
	○ベースライン値は、研究者の資料に基づくものであり、地域が限定されているので全国平均である直近実績値と比較することは困難である。 ○中間評価と直近実績値は変わらない（片側P値＝0.16）。		
（2）データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題（調査手段、方法、分析材料等）がある場合、記載。	○ベースライン値は、研究者の資料に基づくものであり、地域が限定されているので全国平均である直近実績値と比較することは困難である。		
（3）その他データ分析に係るコメント			
（4）最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○変わらない。		C
（5）今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	○1歳6ヶ月・3歳児健康診査は全国各地で行われているため、定点を定めてデータ収集を行うシステムを確立できれば、迅速に全国値を得ることが可能となるため、検討する必要があると思われる。 また、食生活の貧困さが間食回数を高めている可能性があること（H16国民健康・栄養調査データによる分析）から、本指標は、単にう蝕リスクをみる指標だけでなく、適切な食生活（栄養摂取）が営まれているか否かをみる補助的な指標として活用できる可能性がある。 ○甘味食品・飲料の頻回摂取（1日3回以上）により、幼児期のう歯が増加することは内外の文献からも明らかにされていることなどから、中間評価において平成16（2004）年の値をベースライン値として、その約2/3の値を目標値15.0%として設定している。 ○ 間食として甘味食品・飲料を頻回飲食する習慣のある幼児の減少を図ることにより、他の施策とあいまってう歯の減少を図ることも期待できる。		

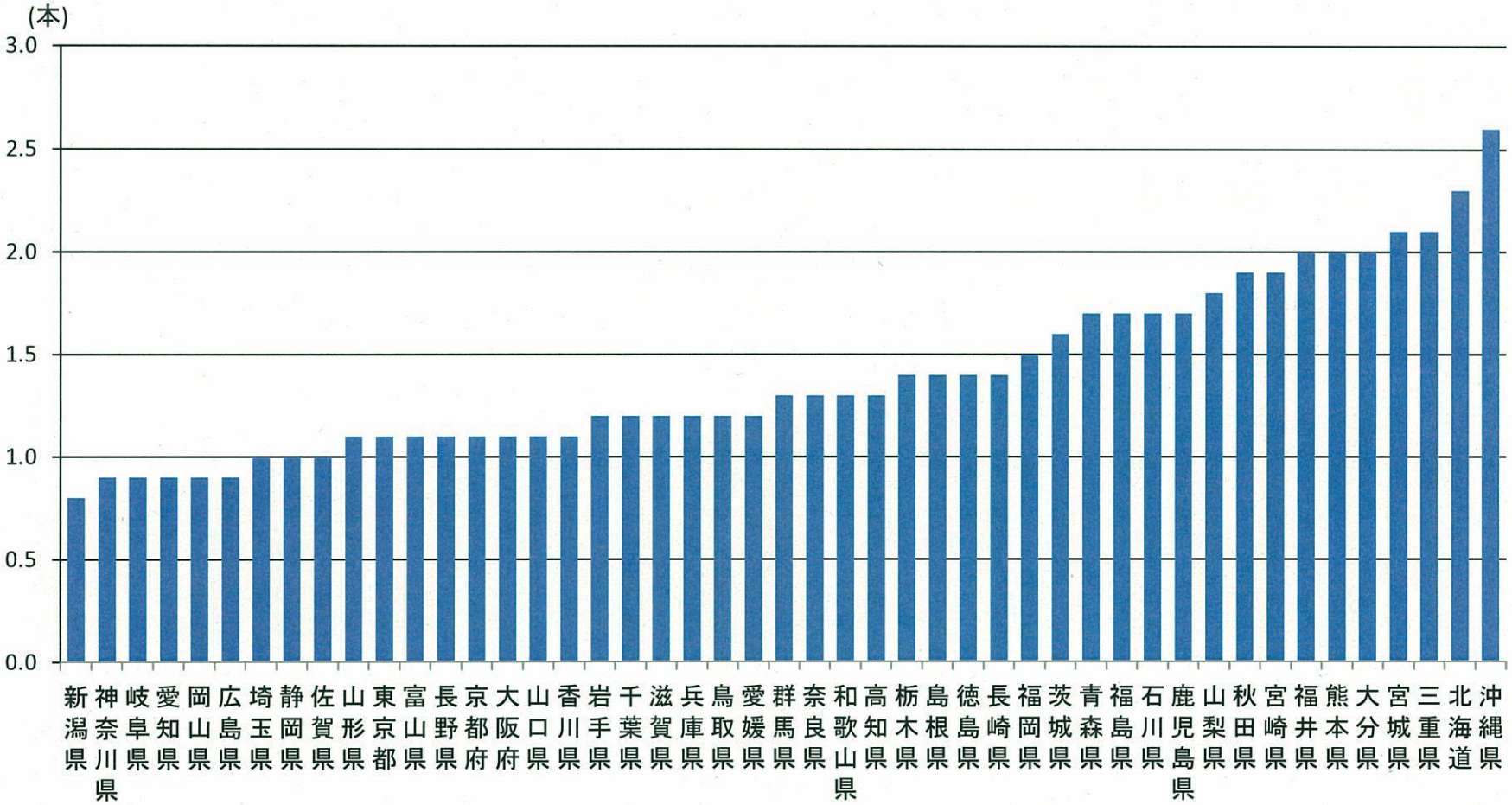
分野：歯の健康

目標項目：6.4　一人平均う歯数の減少（一人平均う歯数－12歳）

目標値	策定時のベースライン値 （H11年度学校保健統計調査）	中間評価 （H16年度学校保健統計調査）	直近実績値 （H22年度学校保健統計調査）
【全国平均】 1歯以下	2.9歯	1.9歯	1.3本

	コメント
	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴（性、年齢、項目別の分類など）を踏まえた分析
（1）直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	○ベースライン値2.9歯に対し、直近実績値では、1.6歯減っている。
（2）データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題（調査手段、方法、分析材料等）がある場合、記載。	○学校保健統計調査であるため、全国規模の結果となっているが、公表資料によると地域における格差がみられ、その分析等も必要である。
（3）その他データ分析に係るコメント	○元々は学校歯科健診のデータのため、各都道府県においても、各学校のデータを市町村が集約し、これを保健所などを経由して都道府県が集約してフィードバックする、というシステムを築くことが可能と考えられる。実際、既に取り組んでいる都道府県は少なくないが、半数近くの都道府県では市町村のデータが把握されていないと思われ、全国的にみてデータが有効利用されているとは言い難く、各都道府県で市町村単位でのデータの収集・評価を促すことを検討する必要がある（なお、3歳児う蝕の場合は、どの都道府県でもデータは市町村単位で評価されるようになっている）。
（4）最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○目標に向け改善したが、目標値には達していない。 B
（5）今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	○小児の永久歯う蝕の予防には、フッ化物洗口、シーラント等の実施が有効であるので、地域の実情に応じて推進していくことが必要である。 ○地域格差が見られることから、地域の特性に応じた対策を推進する必要がある（図2）。 （図2：平成22年度学校保健統計調査における12歳児の一人平均う歯数についての都道府県別比較では、最低値が0.8本、最高値は2.6本（差1.8、比3.25）である）。

図2　12歳児一人平均う歯数（ 都道府県別 ）



資料「平成22年度 学校保健統計調査」

目標項目：6.5 フッ化物配合歯磨剤使用の増加（使用している人の割合）

目標値	策定時のベースライン値 （H3年荒川らによる調査）	中間評価 （H16年国民健康・栄養調査）	直近実績値 （H21国民健康・栄養調査）
【6～14歳の平均】 90%以上	45.6%	52.5%	86.2%

	コメント
（1）直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴（性、年齢、項目別の分類など）を踏まえた分析 ○ベースライン値は、研究者の資料に基づくものであるが、40.6ポイント高い。 ○中間評価と直近実績値との比較では有意に増加した。 （6～14歳：片側P値＜0.001）
（2）データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題（調査手段、方法、分析材料等）がある場合、記載。	○策定時のベースライン値は、全国的な調査であるので、直近実績値と比較することは可能であり、国民健康・栄養調査においても比較は可能である。 ○使用している歯磨剤がフッ化物配合であるか否かについての認識があまりないとも考えられるので、市販の歯磨剤の90%にフッ化物が配合されている現状からみると、使用者はより高率になっていると考えられる。
（3）その他データ分析に係るコメント	○8020推進財団による小中学生2万人を対象とした調査によると、フッ化物配合歯磨剤を使用している児童・生徒の割合は、2005年で88%、2010年で約9割であった。また、フッ化物配合歯磨剤が全歯磨剤に占める割合に関する統計（生産ベース）でも約9割と報告されている。国民健康・栄養調査においてフッ化物配合歯磨剤を使っているか否かを個々に調査するのは現実的に難しいので、H21年調査のように「歯磨剤の利用の有無」を調査し、上述の8020推進財団や業界統計のデータ等を組み合わせて評価することも考えられる。
（4）最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○目標に向けて改善したが、目標値には達していない。 B
（5）今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	

分野：歯の健康

目標項目：6.6　個別的な歯口清掃指導を受ける人の増加（過去1年間に受けたことのある人の割合）

目標値	策定時のベースライン値 （H5年保健福祉動向調査）	中間評価 （H16年国民健康・栄養調査）	直近実績値 （H21国民健康・栄養調査）
【15～24歳の平均】 30%以上	12.8%	16.5%	20.0%

	コメント
	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴（性、年齢、項目別の分類など）を踏まえた分析
（1）直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	○ベースライン値と直近実績値とを比較することは調査の方法や客体などの相違があるが、7.2ポイント高い。 ○直近実績値は中間評価と比較すると有意に増加している。（15～24歳：片側P値＜0.001） ○平成5年、11年保健福祉動向調査での問は、「個別的な歯口清掃」だけでなく、目標項目6.13の「歯科健診」を受けたか否かも含まれている。
（2）データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題（調査手段、方法、分析材料等）がある場合、記載。	
（3）その他データ分析に係るコメント	
（4）最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○目標に向けて改善したが、目標値には達していない。 B
（5）今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	○本目標値と目標項目6.12（歯石除去、歯面清掃）、6.13（定期的な歯科検診）は、互いに重なる部分がある。これらに共通するものは、専門家によるプロフェッショナルケアを高めることであるので、評価しやすい目標値に切り替えるなど、目標値の再整理を検討する必要がある。 ○ 個別的な指導は、地域の歯科医療機関などで実施されることが多く、個別的な歯口清掃指導の必要性とその効果について普及啓発等を推進することが必要であると考えられる。

分野：歯の健康

目標項目：6.7　進行した歯周炎の減少（有する人の割合）

目標値	策定時のベースライン値 （H9～10年富士宮市モデル事業報告）	中間評価 （H16年国民健康・栄養調査）	直近実績値 （H21国民健康・栄養調査）
【a)40歳（35歳～44歳）】 22%以下	32.0%	23.8%	18.0%
【b）50歳（45～54歳）】 33%以下	46.9%	36.8%	27.2%

	コメント
	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴（性、年齢、項目別の分類など）を踏まえた分析
（1）直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	○ ベースライン値は、1地域における調査であり、全国平均の直近実績値と比較することは困難であるが、40歳（35～44歳）では、直近実績値はベースライン値から14ポイント高く、50歳（45～54歳）では、直近実績値はベースライン値から19．7ポイント低い。 ○直近実績値は、中間評価と比較すると、35～44歳、45～54歳とも有意に減少している。 （35～44歳：片側P値＝0.001、45～54歳：片側P値＜0.001） ○ 平成11年の歯科疾患実態調査の結果によれば、35～39歳で26.4%、40～44歳で36.5%、45～49歳で41.0%、50～54歳で43.5%、平成17年の歯科疾患実態調査の結果によれば、35～39歳で23.7%、40～44歳で28.9%、45～49歳で42.8%、50～54歳で41.8%となっており、45～49歳を除き、いずれの年齢階級においても減少傾向が見られる。
（2）データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題（調査手段、方法、分析材料等）がある場合、記載。	○ ベースライン値は、1地域における調査であり、全国平均の直近実績値と比較することはやや問題である。
（3）その他データ分析に係るコメント　・	
（4）最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○ 目標値に達した。　　A
（5）今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	○近年、歯の保有状況が高まってきている（参照：目標項目6.11）ことを踏まえ、60歳、70歳といった高い年齢も評価年齢に加えるのが現実的である。なお、H17歯科疾患実態調査では、進行した歯周疾患の有病率が最も高い年齢層は60歳代である。 ○若年者から壮年者における歯肉炎等軽度の歯周疾患の症状がある者の割合は大きく変化していないことから、若年者への新たな対応と壮年者への対応の充実が必要である。

分野：歯の健康

目標項目：6.8　歯間部清掃用器具の使用の増加（使用する人の割合）

目標値	策定時のベースライン値 （H5年保健福祉動向調査）	中間評価 （H16年国民健康・栄養調査）	直近実績値 （H21国民健康・栄養調査）
【a)40歳（35歳～44歳）】 50%以上	19.3%	39.0%	44.6%
【b)50歳（45～54歳）】 50%以上	17.8%	40.8%	45.7%

	コメント
	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴（性、年齢、項目別の分類など）を踏まえた分析
（1）直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	○ ベースライン値と直近実績値とを比較することは調査の方法や客体との相違があるが、直近実績値はベースライン値と比較して、35～44歳で25.3ポイント、45～54歳で27.9ポイント高い。 （35～44歳：片側P値＜0.001、45～54歳：片側P値＜0.001、） ○ 平成11年の保健福祉動向調査の結果では、35～44歳で32.6%、45～54歳で29.3%であり、直近実績値からすると増加が著しい。
（2）データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題（調査手段、方法、分析材料等）がある場合、記載。	○ 国民健康・栄養調査において定期的に収集しているデータであり、年ごとに上下はあるが全体的に増加している
（3）その他データ分析に係るコメント	
（4）最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○ 目標に向けて改善したが、目標値には達していない。 B
（5）今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	○今後の歯周疾患の増加を考慮して、歯間部清掃用器具を使用する人の割合を高める必要がある。

分野：歯の健康

（再掲）目標項目：6．9　喫煙が及ぼす健康影響についての十分な知識の普及（知っている人の割合）

目標値	策定時のベースライン値 （H10年度喫煙と健康問題に関する実態調査）	中間評価 （H15年国民健康・栄養調査）	直近実績値 （H20年国民健康・栄養調査）
a）肺がん　100%	84.5%	87.5%	87.5%
b）喘息　100%	59.9%	63.4%	62.8%
c)気管支炎　100%	65.5%	65.6%	65.1%
d）心臓病　100%	40.5%	45.8%	50.7%
e）脳卒中　100%	35.1%	43.6%	50.9%
f)胃潰瘍　100%	34.1%	33.5%	35.1%
g)妊娠に関連した異常　100%	79.6%	83.2%	83.5%
h)歯周病　100%	27.3%	35.9%	40.4%

	コメント
	経年変化を踏まえたベースライン値と現状値の分析、特徴（性、年齢、項目別の分類など）を踏まえた分析
（1）直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	○総じて普及度は上昇傾向であるが、疾患毎にその程度は異なっている。 ○肺がん・妊娠に関連した異常などは8割以上の普及度であるが、胃潰瘍、歯周病は半数に満たないものや、気管支炎のように変わらないものもある。 ○ベースラインと比較し、気管支炎と胃潰瘍以外は有意に増加。増加割合が大きいのは心臓病、脳卒中、歯周病。 （肺がん：片側P値＜0.001、喘息：片側P値＜0.001、気管支炎：片側P値＝0.25、心臓病：片側P値＜0.001、脳卒中：片側P値＜0.001、胃潰瘍：片側P値＝0.073、妊娠に関連した異常：片側P値＜0.001、歯周病：片側P値＜0.001）
（2）データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題（調査手段、方法、分析材料等）がある場合、記載。	○喫煙が及ぼす健康影響の範囲をどこまでとするか、受動喫煙についてどう扱うのが適当か検討が必要。どこまでを国民に知ってほしいかの設定も検討課題。
（3）その他データ分析に係るコメント	○脳卒中、心臓病とたばこの関係の認識が進んだのは大きな前進。壊疽など糖尿病合併症との関係も周知できるとよい。今後は、普及すべき知識の再検討が必要。喫煙行動の改善と知識の改善との関連の検討も必要。 ○喫煙と歯周病の進行および現在歯数には、関連が大きく、国民健康・栄養調査の結果などからも明らかにされている。
（4）最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	
（5）今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	○改善の見られない知識項目に関する啓発の強化。知識と行動を結び付けるものの分析。

分野：歯の健康			
（再掲）目標項目：6．10　禁煙支援プログラムの普及（禁煙支援プログラムが提供されている市町村の割合）			
目標値	策定時のベースライン値 （H13年度地域保健・老人保健事業報告）	中間評価 （H15年度地域保健・老人保健事業報告）	直近実績値 （H20年度地域保健・老人保健事業報告）
全国　100%	32.9% （27.8%）	39.7% （32.2%）	－ （38.9%）
	コメント		
（1）直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状値の分析、特徴（性、年齢、項目別の分類など）を踏まえた分析 ○増加傾向にある		
（2）データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題（調査手段、方法、分析材料等）がある場合、記載。	○従来の算出方法では困難であるので、地域保健編より市町村の禁煙指導実績に基づき、全体の割合を出している（括弧部分）。せめて、禁煙支援プログラムで支援した実績量があるとよい。		
（3）その他データ分析に係るコメント	○成人の喫煙調査（モニタリング調査）を継続実施し、禁煙行動、禁煙方法などを調べることが重要。禁煙治療を行っている医療機関の数の推移、ニコチン依存症の治療完了数の実績、OTCによりニコチン置換療法剤の売り上げ量等などは、補足的なデータとなる。		
（4）最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。			
（5）今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	○市町村合併を考慮した分析が難しいので、国民から見て、禁煙したい人が禁煙支援プログラムにどの程度アクセスできたかなどの指標が必要。		

分野：歯の健康			
目標項目：6.11　80歳で20歯以上、60歳で24歯以上の自分の歯を有する人の増加（自分の歯を有する人の割合）			
目標値	策定時のベースライン値 （H5年歯科疾患実態調査）	中間評価 （H16年国民健康・栄養調査）	直近実績値 （H21国民健康・栄養調査）
【a）80歳（75～84）で20歯以上】 20%以上	11.5%	25.0%	26.8%
【b）60歳（55～64）で24歯以上】 50%以上	44.1%	60.2%	55.7%
	コメント		
（1）直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴（性、年齢、項目別の分類など）を踏まえた分析		
	○80歳（75～84歳）で20歯以上有する人の割合は、有意に増加している（片側P値＜0.001）。 ○60歳（55～64歳）で24歯以上有する人の割合は、有意に減少している（片側P値＜0.001）。 ○ H11、H17歯科疾患実態調査の20本以上の歯を有する者の割合においても、80～84歳で13.0→21.1%、75～79歳で17.5%→27.1%、60～64歳で64.9→70.3%、55～59歳で74.6%→82.3%とそれぞれの年代で増加している。		
（2）データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題（調査手段、方法、分析材料等）がある場合、記載。	○ ベースライン値、直近実績値ともに口腔診査によるものであるが、年齢階級区分が異なっているので、単純には比較できないと考えられる。しかし、17年調査結果により補正すると、12年間で80歳代は9.4ポイント、また60歳代では29.4ポイント高くなっており、いずれも既に目標値は達成されている。 ○ 平成11年の歯科疾患実態調査の結果では、80～84歳で13.0%であったので、6年間でおよそ1.3ポイント高くなっていたが、最近の6年間では8.1ポイントと近年急速に高くなる傾向が見られたが、60～64歳では同じ時期に24.0ポイントから5.4ポイントと高くなる傾向がむしろ減退している。 ○ 平成16年の国民健康・栄養調査の結果では、75～84歳で23.0%、55～64歳で71.5%と歯科疾患実態調査の結果と近似している。ただし、これらの数値は自己申告によるものである。		
（3）その他データ分析に係るコメント			
（4）最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○80歳、60歳ともに目標値に達した。		A
（5）今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	○歯の喪失が進むと、咀嚼機能の低下という機能低下に直結するため、今後は咀嚼という機能面での評価も必要と思われる。 また歯の喪失は、長期間で生じる変化であり、歯の喪失自体が他の歯の喪失リスクとなる特質を踏まえると、若い世代にも目標値を設けることも必要と思われる。		

分野：歯の健康

目標項目：6.12　定期的な歯石除去や歯面清掃を受ける人の増加（過去1年間に受けた人の割合）

目標値	策定時のベースライン値 （H4年寝屋川市調査）	中間評価 （H16年国民健康・栄養調査）	直近実績値（H22.10月現在） （H21国民健康・栄養調査）
【60歳（55～64歳）】 30%以上	15.9%	43.2%	42.7%

	コメント
（1）直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴（性、年齢、項目別の分類など）を踏まえた分析 ○ ベースライン値は、1地域における調査であり、全国平均の直近実績値と比較することは困難である。 ○直近実績値は中間評価と比較して変わらない（片側P値＝0.46）が、目標値を達成している。
（2）データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題（調査手段、方法、分析材料等）がある場合、記載。	
（3）その他データ分析に係るコメント	○患者調査で歯科診療所を調べたデータ（歯科診療所票）の傷病別にみた推計患者数の推移をみると、歯周疾患の割合は大きく増加しており、歯科医院で歯石除去や歯面清掃を受けている患者数が大きく増加してきたことが窺える。「健康日本21」に本目標が設定された影響であるか否かを評価するのは難しいが、少なくとも目標達成度を評価する際の補助的データとして利用できると思われる。
（4）最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○ 目標値に達した。 A
（5）今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	○本目標値と目標項目6.6（個別的な歯口清掃指導）、6.13（定期的な歯科検診）は、互いに重なる部分がある。これらに共通するものは、専門家によるプロフェッショナルケアを高めることであるので、評価しやすい目標値に切り替えるなど、目標値の再整理を検討する必要がある。 ○目標値を到達しているが、今後の高齢化と歯周疾患の増加を考慮して、中高年期の方々に加え、若い世代からの自己管理及び定期的な専門家による支援により習慣づけることが必要である。

分野：歯の健康			
目標項目：6.13　定期的な歯科検診の受診者の増加（過去1年間に受けた人の割合）			
目標値	策定時のベースライン値 （H5年保健福祉動向調査）	中間評価 （H16年国民健康・栄養調査）	直近実績値 （H21国民健康・栄養調査）
【60歳（55～64歳）】 30%以上	16.4%	35.7%	37.0%
	コメント		
（1）直近値に係るデータ分析 ・直近値が、目標値に対してどのような動きになっているか、留意点を含み分析	経年変化を踏まえたベースライン値と現状の分析、特徴（性、年齢、項目別の分類など）を踏まえた分析 ○ ベースライン値と直近実績値とを比較すると、有意に増加しており、目標値を達成している。（55～64歳：片側P値＜0.001） ○ 定期的な歯科検診の受診者については、近年微増となってきている ○H5・11保健福祉動向調査での質問は、「歯科検診（健診）」だけでなく、目標項目6.6の「個別的な歯口清掃」を受けたか否かも含まれている。		
（2）データ等分析上の課題 ・調査・分析をする上での課題（調査手段、方法、分析材料等）がある場合、記載。	○H16・21国民健康・栄養調査で評価に用いたデータ（質問）は、「ここ1年間に歯科健診を受けたか否か」であり、「定期的な歯科検診」を受けているか否か、という目標値の主旨を十分示したものとは言い難い面もある。もともと概念整理がやや曖昧なところもあり、今後検討を要するのではないか。		
（3）その他データ分析に係るコメント	○地域および職域における健康診査と保健指導を活用し、定期的な歯科検診の必要性とその効果の普及を図り、予防的な概念を定着させ健康増進を図るとともに歯科医療費の軽減につながることについても普及する必要がある。		
（4）最終評価 ・最終値が目標に向けて、改善したか、悪化したか等を簡潔に記載。	○ 目標値に達した。		A
（5）今後の課題及び対策の抽出 ・最終評価を踏まえ、今後強化・改善等すべきポイントを簡潔に記載	○本目標値と目標項目6.6（個別的な歯口清掃）、6.12（歯石除去、歯面清掃）は、互いに重なる部分がある。これらに共通するものは、専門家によるプロフェッショナルケアを高めることであるので、評価しやすい目標値に切り替えるなど、目標値の再整理等を検討する必要がある。		